

台灣日本語文學報

34

【刊行の辞】

- 曾 秋桂 『台湾日本語文学報』34号刊行序文 1

【論 文】

曾 秋桂	通過儀礼として見た村上『神の子どもたちはみな踊る』論 —トラウマと向き合う物語の装置—	3
内田 康	回避される「通過儀礼」—村上春樹『羊をめぐる冒險』論—	27
吉田妙子	『パン屋〔ゆ／再〕襲撃』と『パン屋を襲う』 —失敗した通過儀礼と70年代の亡靈からのメッセージ—	53
戸田一康	『夕べの雲』における「非日常化」—庄野潤三が確立したスタイル—	77
王 佑心	「文化翻訳」の角度から読む永井荷風『アメリカ物語』 —一人の外遊者の異文化体験—	103
賴 雲莊	太宰治『トカトントン』論—アイロニーとしての「幻聴」—	127
黃 智暉	都賀庭鐘と曲亭馬琴の描く不遇の英雄 —輪廻転生と海外進出をめぐって—	153
賴 錦雀	共起表現から見た日本語の「春・夏・秋・冬」 —中国語との対照比較をかねて—	177
林 青樺	「(し) そうだ」の意味に関する一考察—否定形を中心に—	203
落合由治	ジャンル性における引用表現 —新聞社説における表現構成とその機能—	227
黃 鈺涵	非断定的表現「そうだ」の語用論的機能	253
吳 秦芳	話し言葉における「けど」の考察 —「形式」、「語用論的機能」、「ポライトネス機能」に注目して—	279
深尾まどか	「けど」の終助詞的用法の機能—コーパスに基づく分析を中心に—	305
董 莊敬	日本における能力観の変遷からみたポスト近代型能力と再帰性 —労働と教育の視点から—	331
中澤一亮	ソーシャルネットワーキングサイトを活用した作文読解練習： Facebookを例に	355
黃 士瑩	台湾人及び日本人における潜在的な意見の不一致について —女子大学生を対象に—	381

【活動彙報】

- 2013年7月～12月例会要旨および活動報告 407

2013年12月
台灣日本語文學會

遭迴避的「通過儀禮」
—探討村上春樹《尋羊冒險記》—
內田 康
淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

村上春樹早期長篇小說之一《尋羊冒險記》（1982）當中，被認為存在著既有的故事形態的「通過儀禮」，但對於是否肯定主角的「人性成長」或「自我實現」這點，先行研究有著不同意見。本論文將拿這部作品來比照希臘神話中的英雄冒險故事的代表性傳說「金羊毛傳說」，並指出先行研究意見分歧的原因在於忽略掉主角「我」的「冒險」故事背後，同時有著友人「老鼠」作為〈弑王＝弑父〉的「通過儀禮」過程。這部作品當中的「我」的行為，與《聽風的歌》或《1973年的彈珠玩具》等其他作品相同，最後都止於「下冥府」去〈邂逅死者〉；此外「老鼠」雖然透過擊斃「羊」來象徵地完成〈弑王＝弑父〉，但終究喪失性命。因此無論哪些結局，「通過儀禮」最後的完成步驟都被迴避掉了。在本論文將嘗試論證，這類型故事發展情節所受到的影響，可推測到在法蘭西斯·福特·柯波拉《現代啟示錄》中可看到的，將詹姆斯·喬治·弗雷澤《金枝》的「為達到否定王權存續的弑王」脫胎換骨的主題。

關鍵詞：《尋羊冒險記》 「通過儀禮」 <弑王＝弑父>
「金羊毛傳說」 《現代啟示錄》

The evaded rite of passage:
A study on Haruki Murakami's *A Wild Sheep Chase*
Uchida Yasushi
Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

A Wild Sheep Chase (1982) is one of the early novels written by Haruki Murakami, and we can easily find out the structure of rite of passage in it. But there's no common view whether the growth and self-realization of the protagonist exist at the end of the novel. I'll point out it is because that many readers overlooked the process of rite of passage of 'the Rat', a friend of the protagonist 'I', is hidden behind the plots of the adventure of 'I', comparing with the legend of the Golden Fleece; the representative hero's adventure story of 'the rite of passage' in Greek myths. And in this novel, the protagonist 'I' only does the encounter with the deceased by 'the descent to the underworld', that is like in Murakami's other works; *Hear the Wind Sing* and *Pinball*, 1973, etc. But on the other hand, 'the Rat' killed 'the Sheep' to execute the 'regicide = patricide' symbolically, in exchange for life of his own, so the executions of their initiation are evaded both. I suppose that there are some influences in it from the theme of F.F. Coppola's *Apocalypse Now*; 'the regicide for denying succession of the royal authority' inspired from *The Golden Bough* by J.G. Frazer.

Keywords: *A Wild Sheep Chase*, 'rite of passage', 'regicide = patricide', 'the legend of the Golden Fleece', *Apocalypse Now*

回避される「通過儀礼」
—村上春樹『羊をめぐる冒険』論—
内田 康
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

村上春樹の初期長篇の一つである『羊をめぐる冒険』(1982年)には、これまで物語の型としての「通過儀礼」の存在が指摘されてきたが、その中に最終的に主人公の「人間的成长」や「自己実現」を認めるか否かで、先行研究の見解は分かれている。本稿ではこの作品を、ギリシャ神話における「通過儀礼」的な英雄冒険譚の代表「金の羊毛伝説」と対比しつつ、上記の原因が、主人公「僕」の「冒険」の物語の背後に、友人「鼠」の「通過儀礼」としての〈王殺し＝父殺し〉の過程が並行しているのを見過ごしてきた点にあったことを指摘する。またこの小説においては、「僕」は『風の歌を聴け』や『1973年のピンボール』等同様、「冥府下り」による〈死者との邂逅〉を行うに止まり、一方で「鼠」も、「羊」を斃すことで象徴的に〈王殺し＝父殺し〉を果たすものの、自らも命を落としてしまうため、いずれにせよ結果的に「通過儀礼」の完遂は回避されてしまうのだが、こうした物語展開に、F・F・コッポラの映画『地獄の黙示録』に見られる、J・G・フレイザーの『金枝篇』を換骨奪胎した〈王権の存続を否定するための王殺し〉、という主題からの影響を想定してみたい。

キーワード：『羊をめぐる冒険』 「通過儀礼」 〈王殺し＝父殺し〉
「金の羊毛伝説」 『地獄の黙示録』

回避される「通過儀礼」
—村上春樹『羊をめぐる冒険』論—
内田 康
淡江大学日本語文学科助理教授

Father
Yes, son?
I want to kill you
(The Doors "THE END"¹)

1. 村上春樹『羊をめぐる冒険』と「通過儀礼」
村上春樹の代表的初期長篇『羊をめぐる冒険』(1982年)²には、
従来から物語の型としての「通過儀礼」の存在が指摘されてきた。
しかし、そこに結果として主人公の「人間的成长」や「自己実現」
を認めるか否かで、先行研究の見解は分かれている。こうした認識
のズレが生じたのは一体なぜなのだろうか。以下、この問題を軸に、
当該作品に描かれた「通過儀礼」の物語の性格を分析しつつ、それが
村上の紡ぐ物語において意味するところを考察してみたい。

まず、本作が発表された後の比較的早い時期にこれを「通過儀礼」
という観点から論じたのは四方田(1983⇒1984)³であった。だが彼
は「困難の克服のすえに自己同一性を保証するに足るなにがしかの
獲物を得て帰還する、という通過儀礼の物語はここにはない。『羊を
めぐる冒険』は教養小説を根拠づける意味の体系が燃え崩れてしま
った後に残された鉄骨の残骸であり、聖杯伝説に代表される探求の

¹ 1967年1月発売のアルバム『THE DOORS』所収。周知のように、後にF・F・コッポラ監督『地獄の默示録(Apocalypse Now)』(1979年)において、オープニング曲および挿入歌として使用された。

² 『群像』(講談社、1982年8月号)初出、同年10月講談社刊。本稿での引用は『村上春樹全作品1979~1989② 羊をめぐる冒険』(講談社、1990年)による。

³ 四方田犬彦「聖杯伝説のデカダンス—限りない空白の陰画」(『新潮』1983年1月号)。引用は高橋丁未子編『HAPPY JACK 鼠の心—村上春樹の研究読本』(北宋社、1984年)による。

物語群の余剰物、^{おり}濶、換言すればデカダンスである」（157 頁、下線引用者、以下同じ）と主張し、更に加藤編（1996）⁴も、この四方田の説を引用しつつ次のように述べている。

ここに困難克服と人間的成长といった通過儀礼の実質は見あたらない。【中略】『羊をめぐる冒険』は、むしろ最初から物語の空転をめざして書かれた、自分を否定する、教養小説（ビルドウングス・ロマン）なのである。（加藤典洋編『村上春樹 イエローページ』55～56 頁）

本作の物語の内実に「通過儀礼」が認められないとする点で、両者の見解に差異はない。但し、四方田が本作を、「教養小説」としては「鉄骨の残骸」「デカダンス」と批判するのに対し、加藤はそうした性格を「最初から物語の空転をめざして書かれた」ものと捉えているところに違いが見られる。彼は当該論考において、村上が高く評価している F・F・コッポラ監督の映画『地獄の黙示録(Apocalypse Now)』⁵と『羊をめぐる冒険』との相関性に注目し、両者がともに示す「空転」の印象が、「思想性の欠如」を動因とした「プライヴェートネスからくる」（同上 59 頁）ものであると論じ、更に、小説において「なぜこの遍歴の終点である別荘が、ふりだしの『風の歌を聴け』の世界につながる鼠の父親のものでなければならないのか」、「そこはプライベートな場所である。これが物語の空間として永遠に成人できない空疎な場所であることを、作者は、この去勢行為によって、確定している」（同上 72 頁）と、寧ろ物語自体が「去勢」されたものとして提示されていることに積極的意義を見出している。

一方、この加藤に対して異を唱えるのが大塚（2009）である⁶。

⁴ 加藤典洋編『村上春樹 イエローページ』（荒地出版社、1996 年）。

⁵ 村上はエッセイ「《同時代としてのアメリカ 3》方法論としてのアナーキズム—フランシス・コッポラと『地獄の黙示録』」（『海』1981 年 11 月）の発表直後頃に『羊をめぐる冒険』の執筆を開始している。また本稿後掲注 43 も参照。

⁶ 大塚英志『物語論で読む村上春樹と宮崎駿—構造しかない日本』（角川 one テ

村上春樹はしかし、初期二作に顕著だった死者の国への巡礼の旅というフレームにキャンベル型の物語構造を導入し、結果『羊をめぐる冒険』では主人公は自己実現をさせられてしまっている。しかし加藤は違うといってはばからない。【中略】ルーク（映画『スター・ウォーズ』の主人公ルーク・スカイウォーカー：引用者注）や「僕」がどんなに感傷的でも父なる敵を自ら倒し、世界を救うという英雄神話を彼らは生きてしまっている。

（大塚英志『物語論で読む村上春樹と宮崎駿』134～135頁）

大塚は、村上が『羊をめぐる冒険』を執筆するにあたり、G・ルーカス監督が映画『スター・ウォーズ (Star Wars)』を撮る際に参照したJ・キャンベルの神話論を援用していると推測し、本作は「英雄神話の構造に忠実で」、村上は「一度だけ物語構造に引っ張られて主人公の自己実現ストーリーをうっかり書いてしまった」（同上 135頁）のだと主張する。村上作品に見られる物語構造への注目という点で、大塚論の意義は大きく、また本稿でも後述する如く、本作と『スター・ウォーズ』との関連性も確かに存在する。だが、稿者も以前指摘したように⁷、村上がキャンベルの神話論に親近感を表明しているのは事実だが、彼の書いた小説が実際どこまで神話的な物語構造に忠実なのは、あらためて考えてみる必要があるのではないだろうか。そして、実際キャンベルの論は、神話や物語を通過儀礼と併せて考察するにあたって益するところが多い。そこで次に我々も、まずこのキャンベルを参照しながら、村上作品にとっての物語的「通過儀

一マ 21、2009年）。

⁷ 拙稿「村上春樹『1Q84』論—神話と歴史を紡ぐ者たち—」（『淡江日本論叢』26、2012年12月）参照。村上には「僕はこのところジョーゼフ・キャンベルの『時を超える神話』と『生きるよですがとしての神話』という二冊の本を何度も繰り返して読んでいました。【中略】僕の抱いてきた小説観ともかなり呼応するところがあります。」（『「これだけは、村上さんに言っておこう』』（朝日新聞社、2006年）57頁、質問74（At 8:40AM 97.9.6）への回答）との発言がある。

礼」が如何なるものか、その意義を見ていくことにしよう。

2. 「金の羊毛伝説」という「通過儀礼」と、「僕」の物語

最初に、大塚も重視する『千の顔をもつ英雄』を繙いてみたい。

英雄の神話的冒険が通常たどる経路は、通過儀礼を説明する
さいにつかわれる公式「分離—イニシエーション—再生」を拡
大したもので、これを原質神話の核心を構成する単位だといつ
てしまってもかまわないかもしない。

英雄は日常世界から危険を冒してまでも、人為の遠くおよば
ぬ超自然的な領域に赴く。その赴いた領域で超人的な力に遭遇
し、決定的な勝利を收める。英雄はかれにしたがう者に恩恵を授
ける力をえて、この不思議な冒険から帰還する。

プロメテウスは天上に昇って、神々の火を盗みだして地上に
降りてきた。イアソンはシュンプレガデスの二枚岩をかいくぐ
って大海に船出し、黄金の羊毛を護っていた巨竜を籠絡して羊
毛を手に入れて帰還し、正統な王権を篡奪者から奪いかえす力
を手に入れた。(J・キャンベル『千の顔をもつ英雄』⁸上、44
～45頁)

ここで、キャンベルが「通過儀礼」の「公式」として挙げている
のは、おそらくはA・ファン・ヘネップ (A·ヴァン·ジュネップ) が
『通過儀礼 (Les Rites de Passage)』で述べた「分離 (séparation)」「過渡 (marge)」「統合 (agrégation)」という儀礼の三分類を念頭
に置いたものであろう⁹。この後キャンベルは、これを「出立」「イ

⁸ ジョゼフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄 (The Hero with a Thousand Faces)』(平田武靖／浅輪幸夫監訳、人文書院、1984年)。圈点は本文のママ。またイタリック体は本文中の訳注指示による。

⁹ ファン・ヘネップ『通過儀礼』(綾部恒雄・綾部裕子訳、弘文堂、1977年⇒岩波

ニシエーション」「帰還」の三段階へと読み替え、更に合計 17 の下位項目に細分化した上で、彼の考える所謂「原質神話 (monomyth)」の構造を明らかにしていく。ここで例として引き合いに出されている神話の一つに、イアソンとアルゴー船の遠征と関わる所謂「^{ゴールデン・}金の羊毛伝説」が挙がっているのが興味深い。『羊をめぐる冒険』における「羊」が意味するものに関してはこれまでも様々な解釈がなされ¹⁰、特に西欧文明との関連では、キリストとの繋がりが指摘されましたが¹¹、寧ろこの、間違いなく世界最古の〈羊をめぐる冒険〉の一つとして人口に膾炙しているギリシャ神話の「金の羊毛伝説」と村上作品との相関性は、もっと注目されてもよかろう¹²。そう考えると、黒服の秘書を介して「僕」を「羊」探しに赴く羽目に陥らせる、「強大な地下の王国」の「王様」としての「右翼の大物」（「先生」）は、イアソンに金羊の毛皮の探索を命じるペリアス王ということになるし、不思議な力で「僕」の助手を務める「耳のモデル」は、魔術を使ってイアソンを助ける王女メディアの変奏された姿であるかに見えてくる¹³。こうした解釈はこじつけに過ぎないと考える向きもあるかもしれないが、次の点はどうだろうか。作中で、山上の別荘に辿り着いた「僕」は、そこで「コンラッドの小説」（301 頁）に加え「「プルターク英雄伝」や「ギリシャ戯曲選」やその他の何冊かの小説」（302 頁）が置かれているのを発見する。このうち前者は、後で

文庫、2012 年）、22 頁。また同書の綾部真雄による〔解説〕345 頁にも、キャンベルへのファン・ヘネットの影響が指摘されている。

¹⁰ 紙幅の関係で詳細は省くが、今井清人『村上春樹—OFF の感覚—』（国研出版、1990 年）180～181 頁や山根由美恵『村上春樹〈物語〉の認識システム』（若草書房、2007 年）110～111 頁に整理がある。

¹¹ 関井光男「村上春樹論：〈羊〉はどこへ消えたか」（『國文學』1985 年 3 月号）124 頁。また、久居つばき・くわ正人『村上春樹の読み方—キーワードの由来とその意味』（新潮社、1991 年⇒雷韻出版、2003 年）157 頁以下も参照。

¹² 『羊をめぐる冒険』と金の羊毛の繋がりを早い時期に示唆したのは生井英考「村上春樹と黄金の羊」（『ユリイカ』1983 年 12 月号）だろうと思われる。だが生井はここでこの「黄金の羊」を「ブルックス・プラザーズの商標」（187 頁）のそれと結びつけるだけで、イアソンの伝説との相関に深く立ち入ってはいない。

¹³ 「金の羊毛伝説」については、アポロドーロス『ギリシア神話（Bιβλιοθήκη）』（高津春繁訳、岩波文庫、1953 年）57～68 頁を参照。

問題にするように『闇の奥 (Heart of Darkness)』を指すと考えられ、『羊をめぐる冒険』のストーリー自体との相関性も指摘されているのだが、では後者のギリシャ関係の二冊は、何故わざわざここに言及があるのか。「ギリシャ戯曲選」というだけでは、どんな作品が収められていたのか特定しがたい。だが一つの可能性として、そこにエウリピデスの代表作「メディア」が収録されていたと想像するのは、必ずしも無理ではない。実際、村上が十代の頃に愛読した河出書房の世界文学全集には¹⁴、III-1に『イリアス オデュッセイア ギリシア演劇集』(1966年)の巻があり、そこにエウリピデスの作品として唯一入っているのが「メディア」である点からすれば、ここでこの戯曲が暗示されていることも充分考えられる。これは、周知のように「金の羊毛伝説」の後日談を描いたもので、メディアがイアソンの新妻や我が子を殺して彼の元を去る話だが、劇中では当然、金の羊毛のエピソードも語られる。(因みに、後で触れる三島由紀夫はこの戯曲を典拠に短篇小説「獅子」を書いており、そこに村上との対抗関係を読み取ることも可能である¹⁵。) 更にメディアは、現行の『プルターク英雄伝』でも、第一話「テーセウス」に登場、テーセウスの毒殺に失敗する¹⁶。テーセウスと言えば牛頭人身の(「羊男」ならぬ「牛男」の)怪物ミノタウロスの退治で有名だから、「羊」を斃す「鼠」のイメージには、彼の投影を見ることも充分にできよう。

以上のことから、『羊をめぐる冒険』の背景にはギリシャ神話、特に「通過儀礼」の物語としての「金の羊毛伝説」が存在している

¹⁴ 村上春樹『村上朝日堂』(若林出版企画、1984年⇒新潮文庫、2007年)200頁。

¹⁵ また、『羊をめぐる冒険』を三島の『夏子の冒険』(1951年)の「パロディ」と捉える説もある。千野帽子「解説」(『夏子の冒険』(角川文庫、改版2009年))、高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』(平凡社新書、2010年)を参照。

¹⁶ 『プルターク英雄伝(一)』(河野与一訳、岩波文庫、1952年)28頁。なお前掲注13アポロドーロス(1953)では「テーセウスは父に認められ、陰謀を知つてメーディアを追い拂つた」(180頁)と、彼がメディアを追放したともされており、「耳のモデル」が「羊男」の姿を借りた「鼠」に追われる内容とより対応するし、彼女の消失と二冊のギリシャ関係書籍との繋がりも更に明確になろう。

と考えてよさそうだ。但し、両者で大きく異なるのは、イアソンがメデイアの援助を得て金羊の毛皮を手に入れるのに対して、「耳のモデル」の方は「羊男」の体を借りた「鼠」に追わされて山を去り、「僕」もまた「羊」を得ることのないまま帰還するという点である。これが即ち、四方田や加藤が述べていたように、この小説には実質的に「通過儀礼」が認められないとされる所以だが、では一体なぜこうした事態が起こるのかといえば、それは、どうやらここでイアソン型の物語に、また別種のストーリーが〈接ぎ木〉されているためではないかと考えられるのである¹⁷。以下これについて述べていこう。

キャンベルは、『千の顔をもつ英雄』の別の箇所で、次のように書いていている。「英雄に殺される竜は、現状維持の怪物、過去に執着する^{ステータス・クオトロ}死亡者にほかならない。【中略】権力の座を占めるこのものが敵であり竜であり専制君主であるのは、私利私欲のため特權を乱用するからである」(下、160頁)。「单刀直入にいうなら——英雄の仕事とは、父親における執着する面（竜、試練を課する者、人食い鬼の王）を屠りさり、その禁制から宇宙を再生産する生命エネルギーを開放するところにある」(同上 177頁)。つまり英雄の敵とは、〈父親〉の持つ「執着」という面が〈竜=怪物〉や〈専制君主=王〉の姿をとって現れたものであり、この敵を斃すことで宇宙は再びエネルギーに満ちて再生する、ということだ。ここで再び「金の羊毛伝説」に目を向けると、問題の羊毛を手に入れるためにイアソンを援けて竜を眠らせ、更に王位篡奪者ペリアスを殺したのはメデイアだったわけだが、一方「耳のモデル」に去られた『羊をめぐる冒険』の「僕」は、この流れでいくなら立往生するほかないことになる¹⁸。そこに、

¹⁷ 前掲注 13 アポロドーロス (1953) によれば、ギリシャ神話におけるイアソンも、帰還後に恙無く王位を継承できたわけではなく、更に、メデイアと別れたせいで不幸に陥っていくことから、その点も併せて村上作品のベースになっている可能性もあるが、後述のように、「羊」を手に入れようとする話が、「耳のモデル」=メデイアを結節点に「鼠」の物語へと反転していくという本作品のポイントに注目するなら、ここでの村上の創意も重視されるべきだと思われる。

¹⁸ 柴田勝二は『中上健次と村上春樹』(東京外国語大学出版会、2009年) 123頁

彼女の退場を結節点のようにして現れるのが「羊男」＝「鼠」だった。では、ここで彼が割り込んでくることの意味とは何だろうか。

『羊をめぐる冒険』の、とりわけ「僕」と「鼠」の関係について、内田樹（2007）が面白い指摘をしている¹⁹。それによると、実はこの小説の説話構成は日本でも一世を風靡した韓流ドラマ『冬のソナタ（겨울연가）』と酷似しており、「鼠」とは「僕」が「正しく弔うことに失敗した死者である」（50頁）のだという。のみならず内田は、「『冬ソナ』は複式夢幻能とも同一の劇的構成を持っている」（45頁）とも述べる。彼はここまでしか言っていないのだが、もしこのロジックが成り立つとすれば、『冬のソナタ』とよく似た構成の『羊をめぐる冒険』もまた、複式夢幻能と同じつくりを有しているということになろう。そして実際、「僕」＝ワキ、「羊男」＝前ジテ、「鼠」＝後ジテと考えれば、確かに山の別荘での二人の対話場面と驚くほど一致するのである²⁰。だとするとここでは、それまで主人公だったはずの「僕」が、反転してワキ役にまわり、バイプレイヤーだと思われていた「鼠」の方がシテ＝主役の立場を〈代行〉することになる²¹。それでは、恰も「英雄」テーセウスを髣髴とさせるような

以降および143頁で、「耳のモデル」が黒服の秘書の組織からの指示で動いていたとも解釈できるような両義性をテクストが持つことを説得的に論じている。但し、その全てが「鼠」の差金だとの見解は、柴田も参照する坪井秀人「プログラムされた物語」（『國文學』1998年2月臨時増刊号）の論を発展させたものと思しいが、なお検討の余地があろう。また柴田は、かかる読みを前提に「〈羊探し〉として進行していった行動が〈鼠探し〉の物語へと裏返されていくという、物語の反転が現出することになる」（131頁）と述べるが、彼が言うところの「物語の反転」は、本稿で後述する「物語の〈主役交替〉」とは内実が異なる。

¹⁹ 内田樹『村上春樹にご用心』（アルテスピブリッキング、2007年）44～53頁所収、「『冬ソナ』と『羊をめぐる冒険』の説話論的構造」（2006.7.3）。

²⁰ 「夢幻能には定型がある。現在体の人物（ワキ）が、ある土地で化身体の人物（前ジテ）に出会う。後者はその土地にまつわる物語りをして、最後に本体をほのめかして消える（中入。ここまでが前場）。待つうちに盡体（後ジテ）の姿で再出現し、仕方話をしたり舞を舞ったりする（後場）」（『新訂増補 能・狂言事典』（平凡社、1999年）271頁）。注7拙稿でも触れたが、村上は中世文学に対する関心が比較的高い。能に関しては不明だが、早稲田大学で映画演劇科専攻だったことからすれば、彼が関連知識を有していても不思議ではあるまい。

²¹ 伊川龍郎『休日の村上春樹』（ボーダーインク、2000年）も、83頁で村上の初期短篇「土の中の彼女の小さな犬」を能の構造に引き付けて解釈し、更に別

「鼠」を主人公とした物語とは一体如何なるものだったのだろうか。

3. 「英雄」としての「鼠」—〈王殺し＝父殺し〉の物語

フロイト派出身の精神分析家で、キャンベルによってもその著作が参照されているO・ランクは、英雄神話の分析に際してこう言う²²。

父が殺そうとして課した課題（英雄的行為）を解決することによって、英雄は おしまいには父の地位に到達する（そして女性を獲得する）。すでにこのことからして、英雄の果す手柄は父親殺しの代用だということが判明する。そしてこのことから、英雄的なこととはまさに父親の克服に他ならないという公式が生れる。（O・ランク『英雄誕生の神話』153～154頁）

これは明らかに、先に見たキャンベルにおける英雄とその父親との関係に関する解釈へと通じるものを見ていよう。かかる観点を前提に、再度『羊をめぐる冒険』に立ち返ってみたい。我々読者はこの作品を読むに際し、さしあたり「僕」を「Seek and Find」という〈冒険〉の主人公＝「英雄」に見立ててページをめくっていく。仮に物語の向うに「金の羊毛伝説」が透けて見えるとすれば、それは当然であろう。だが、そもそも彼に、「英雄」の要件としての〈父殺し〉への志向性があつただろうか。例えば前掲内田樹は²³、村上春樹の文学には、「その社会の秩序の保証人であり、その社会の成員たち個々の自由を制限する「自己実現の妨害者」」(37頁)たる「聖なる天蓋」としての「父」が登場しない、「だから、村上文学は世界的になった」(同上)と述べ、その上で『1Q84』(2009～2010年)に至って「「父」が前面に登場してきたこと」を「かつてない大きな

の箇所で『羊をめぐる冒険』に触れ、「シテである「鼠」は、「僕」の幻想の中ではすでに責めを負って死んでいるものの象徴だ」(144頁)と述べている。

²² オットー・ランク『英雄誕生の神話 (Der Mythos von der Geburt des Helden)』(野田卓訳、人文書院、1986年)。圈点は本文のママ。

²³ 注19 前掲書『村上春樹にご用心』36～41頁所収、「「父」の不在」(2006.5.2)。

変化」として把えているし²⁴、また加藤典洋も『村上春樹 イエローページ PART 2』第四章等において²⁵、村上作品では連作短編集『神の子どもたちはみな踊る』(2000年)で初めて「父なるもの」をめぐる主題系が浮上すると主張している。だが村上自身の次の発言に留意するなら、彼における「父」の問題の更なる根深さが伺えよう²⁶。

父性というのはつねに大事なテーマでした。現実的な父親というより、一種のシステム、組織みたいなものに対する抵抗力を確立することは、大事な意味を持つことだった。【中略】父性というのは制度的な束縛であるわけです。それを振り払って自分が個であり自由であることを求めるのは、僕にとって普遍のテーマです。(「村上春樹ロングインタビュー」61頁)

『羊をめぐる冒険』に限ってみても、これまで今井清人のように「鼠三部作」の世界を通して「母親殺し」という観点から読み解く試みが存した²⁷。では「父」の方は如何に描かれているだろうか。まず「僕」と家族との関係については、第五章の3において、結婚の際に発生した実家との不和が語られるだけであり(113~114頁)、更に溯って『風の歌を聴け』(1979年)²⁸でも、「子供はすべからく父親の靴を磨くべし」(61頁)という「家訓」を守ったせいで「左手の指が4本しかない女の子」と会う約束に遅刻する始末である。

²⁴ 内田樹『もういちど村上春樹にご用心』(アルテスパブリッシング、2010年)61~68頁所収、「父」からの離脱の方位」(2009.6.6) 62頁。

²⁵ 加藤典洋編著『村上春樹 イエローページ PART 2』(荒地出版社、2004年)。

²⁶ 『考える人』(新潮社、2010年夏号)所収、「村上春樹ロングインタビュー」。

²⁷ 注10前掲書、今井清人『村上春樹—OFFの感覚—』(国研出版、1990年)「II 三部作の世界」参照。今井は特に「羊」の解釈にユングを援用し、それを「自我を誘いこみ去勢する、優しく美しい一方恐ろしく邪悪な、両義性を持つ太母(グレートマザー)を象徴するもの」「「僕」が自己を手に入れるドラゴン退治=母殺しの物語を貫徹するためにフリークス性=幻想を背負わされて屠られる用意されたスケープゴートだ」(185頁)と把えている。

²⁸ 以下本稿での引用は、『村上春樹全作品 1979~1989① 風の歌を聴け・1973年のピンボール』(講談社、1990年)による。

ここで「父親」に言及することで、表面上であれ、「僕」を父の権威に従う息子を演じる役柄のように彼女ならびに読者へと印象づける、という効果が醸し出されている。或いは、『羊をめぐる冒険』第三章の1で、「僕」の少年時代の回想として唐突に語られる水族館の「鯨のペニス」に関する挿話、就中「そこには切り取られたペニス特有の何かしら説明しがたい哀しみが漂っていた」(44頁)との彼の述懐は、S・フロイトの所謂「去勢の恐怖」を暗示するかの如くである。

少年はある瞬間に、ライヴァルである父親を殺そうとすると、その父親によって去勢で処罰されてしまうだろうということを理解するのである。少年は去勢を恐れ、自分が男性でありつづけたいと願う。そのため、父親を殺害して母親を自分のものにしたいという願いを放棄するのである。(フロイト「ドストエフスキーと父親殺し」249頁)²⁹

『風の歌を聴け』に始まる「僕」の世界には、後の『海辺のカフカ』や『1Q84』に見られるような「母」をめぐる問題が出てこないため、フロイト流のエディップス・コンプレックス的な解釈がどれほど有効かは疑問である。だが少なくとも、切断された鯨のペニスを見つめつつ悲哀を覚える「僕」の姿に、〈父殺し〉を回避しようとする少年のイメージと通い合うものがあるのは確かだろう。そしてこうした彼の造形が、内田や加藤の如き³⁰、村上の初期作品における「父」の不在という認識を生み出していると考えられるのである。

ところが一方、彼の分身たる「鼠」の方は、『風の歌を聴け』において「金持ちなんて・みんな・糞くらえさ」(12頁)という憂鬱

²⁹ フロイト『ドストエフスキーと父親殺し／不気味なもの』(中山元訳、光文社古典新訳文庫、2011年)。

³⁰ 本稿第1節で触れたように、加藤編(1996)は『羊をめぐる冒険』の物語を、「本当の物語に成人することを防止するための「去勢」がなされている」(65頁)と把えるが、「僕」の態度を〈父殺し〉(父との対決)の回避だと考えるなら、或いは寧ろそれは〈「去勢の恐怖」に怯える物語〉と言うべきかもしれない。

そうな怒鳴り声とともに我々の前に初めて登場した時点から、既にその「金持ち」の一人であるはずの父親への反感を間接的に露わにしていたことになる。そしてそんな彼は、「羊」を探索する「僕」が山の上の別荘に辿り着く前に、その〈怪物〉としての「羊」を呑み込んだまま自ら縊れて死ぬ。「羊」から、宿主になる代償に「完全にアナーキーな観念の王国」(『羊をめぐる冒険』356頁)の中心への君臨を提示されながら、「鼠」はそれを拒否して死んだ。なぜか。

「何故拒否したんだ?」【中略】

「俺は俺の弱さが好きなんだよ。苦しさや辛さも好きだ。夏の光や風の匂いや蟬の声や、そんなものが好きなんだ。どうしようもなく好きなんだ。君と飲むビールや……」(同上 356頁)

「キー・ポイントは弱さなんだ」(同上 353頁)と述べる「鼠」の言葉のとおり、あくまでも「弱さ」を守り続けようとする彼の姿勢こそが、「羊」に対抗する武器となり、また彼に自ら命を絶つという選択を齎したのだった。吉田(1997)が指摘するように、以上の「鼠」の述懐は、『風の歌を聴け』で彼が「僕」に向けて語って聞かせた天皇の巨大な古墳を前に感じたこととダイレクトに結びついている³¹。

「【前略】そいつはあまりに大きすぎた。巨大さってのは時々ね、物事の本質を全く別のものに変えちまう。【中略】

俺は黙って古墳を眺め、水面を渡る風に耳を澄ませた。その時に俺が感じた気持ちはね、とても言葉じゃ言えない。【中略】

「文章を書くたびにね、俺はその夏の午後と木の生い繁った古墳を思い出すんだ。そしてこう思う。蟬や蛙や蜘蛛や、そして

³¹ 吉田春生『村上春樹、転換する』(彩流社、1997年) 67頁。吉田はここで、この「鼠」の姿勢に関し、「これらは、処女作『風の歌を聴け』(引用者注)で示されていた「僕」の生きる姿勢—他人を放り捨てることで保持される強さ(の振り)—とは正反対のものである」と的確な指摘を行っている。

夏草や風のために何かが書けたらどんなに素敵だろうってね」

(『風の歌を聴け』91~92頁)

思えば、王権の継承に自ら背を向ける「鼠」の態度は、このように天皇（＝〈王〉＝〈父〉）の強大な権威を象徴する古墳を眼にしながら、寧ろちっぽけでささやかな「蟬や蛙や蜘蛛や、そして夏草や風」に寄り添うことを考えるという彼の哲学に基いていたのだった。ここで、佐藤（2011）³²における以下の指摘に目を向けてみたい。

鼠の自殺は、『金枝篇』的な王権存続を身を挺して阻止する行為であった。それに対して「僕」の冒険は、大物右翼の秘書である黒服の男が、新しい「羊」の宿主に接近し利権を掠め取るために仕掛けた路線を辿るだけのものでしかなかった。重い決断のドラマは、鼠の方に起こっていたのである。（佐藤秀明「村上春樹の「王殺し」」113頁）

この佐藤の考察は、J・G・フレイザーの『金枝篇（The Golden Bough）』の王殺しが、「強力な王権の継承のためになされる行為であるのに対し、『1 Q 8 4』では王権の継承を一時でも阻止するためになされる」（同上 112 頁）こと、また「むしろ『羊をめぐる冒険』の「羊」の方が、『金枝篇』に近い意志をもっている」（同上）ことを論じたものである。そして更に、別に佐藤が述べるとおり、「『羊をめぐる冒険』の「王」は、はじめ右翼の「先生」だと思われたのだが、実は「先生」は王の身体で、王そのものは「羊」だということが次第に分かってくる」（同上 116 頁）。もしキャンベルの説に拠るとすれば、〈怪物〉かつ〈王〉としての「羊」とは正に〈父親〉（における「執着」という側面）だということになろう。ここに、先の加藤典洋による「なぜこの遍歴の終点である別荘が、ふりだしの『風

³² 佐藤秀明「村上春樹の「王殺し」」（日本近代文学会関西支部編『村上春樹と小説の現在』和泉書院、2011年）。

の歌を聴け』の世界につながる鼠の父親のものでなければならないのか」という不審に対する答えも存する。それは「物語の空間として永遠に成人できない空疎な場所である」からというより、物語の背後で「鼠」にとっての（テーセウスのミノタウロス退治と〈父王殺し〉にも一脈通じる）「通過儀礼」としての〈王殺し＝父殺し〉という象徴界のドラマが進行していたことを示すために必要な舞台装置だった、と見るべきではないか³³。このような二通りの物語の並行関係というのは、言うまでもなく、所謂「鼠三部作」の第二『1973年のピンボール』（1980年）を直接的に受け、次の長篇『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985年）へと繋がっていくものであろう。一方で「僕」の方も、自分を利用した黒服の秘書を最後に斃しはするが、それとて「鼠」の指示によるものであって、表層での「僕」と秘書との戦いとは、深層における「鼠」と「羊」との戦いの射影であったとも言える。かくて「僕」は、「通過儀礼」を完遂せぬまま、基本的には前の二長篇と同様に「冥府下り」による〈死者との邂逅〉を果たして戻って来るわけで、この帰還する「僕」に注目するか、〈王殺し＝父殺し〉を実行する「鼠」に注目するかで、二つの異なる「通過儀礼」譚の型が見えてくる。そして、これらの物語の途中での〈主役交替〉の見過ごしが、本作の構造を、今まで捉えにくくしてきた要因だったのではないかと考えられるのである。

「羊」をめぐる「僕」の冒険譚の底流には、実は「鼠」をめぐるもう一つの物語が隠されており、そこでは「鼠」こそが「英雄」の役割を担っていたのであった。とはいえたの「鼠」も、「羊」の息の根を止めることで〈王殺し＝父殺し〉を果たすものの、自らもまた命を落としてしまうために、「僕」にせよ「鼠」にせよ、結果的に、作品中での「通過儀礼」の完遂は回避されることとなってしまう。これは一体どうしたことであろうか。そこで次に節を改めて、この

³³ 『風の歌を聴け』28章（83頁）で、「鼠」の父の金儲けが戦争と結びつけて語られることに注意。また「鼠」は、『プルターク英雄伝』によれば父王の死後に王政を廃したとされるテーセウスと同様、〈王殺し〉後の支配権の継承を拒む。

〈「通過儀礼」の回避〉の意味について考えていくことにしたい。

4. 回避される「通過儀礼」——『地獄の黙示録』との関わりから

『風の歌を聴け』と『1973年のピンボール』の世界を引き継いだ『羊をめぐる冒険』に村上春樹が仕込んだのは、「通過儀礼」としての〈王殺し=父殺し〉の物語だった。このモティーフは一体どこから来たのだろうか。彼の川本三郎との対話での「『長いお別れ』を徹底的に下敷きにしてる」³⁴という発言から、村上が執筆に際し、自ら「これまでの人生で巡り会ったもっとも重要な本」³⁵三冊として、フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー (The Great Gatsby)』やドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟』と並べて挙げる、R・チャンドラー『ロング・グッドバイ (The Long Goodbye)』(村上訳は2007年刊行)を参照しているのは間違いない。だが、彼がチャンドラーのこの作品に依拠した点は、恐らく「方法としてのハードボイルド」に基いた〈友との別れ〉であろうと思われ、それはそれで作品の中核部分を占めるものであるわけだが、ここから〈王殺し=父殺し〉の主題は見えてこない。或いは、中上健次との対談での「『羊……』を書いたときは、村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』と、中上さんの『枯木灘』と『岬』を読んで刺激を受けたところはありますね。小説としての根源的な力を身につけていきたいという。」³⁶との発言に注目するなら、対談相手への配慮は多少差し引くにしても、〈母殺し〉を扱った村上龍の作品に加え、まさに主題としての〈父殺し〉そのものを前面に押し出した中上の作品が、実際村上に与えた示唆は大きかったと推察される。だが本稿においては寧ろ、先にも引合いに出した『地獄の黙示録』に注目したいと思う。「村上春樹

³⁴ 川本三郎・村上春樹「R・チャンドラーあるいは都市小説について」(『ユリイカ』1982年7月号) 135頁。また村上春樹「《同時代としてのアメリカ5》都市小説の成立と展開—チャンドラーとチャンドラー以降」(『海』1982年5月)も参照。

³⁵ スコット・フィッツジェラルド／村上春樹訳『グレート・ギャツビー』(中央公論新社、2006年)「翻訳者として、小説家として—訳者あとがき」333頁。

³⁶ 中上健次・村上春樹「対談 仕事の現場から」(『國文學』1985年3月号) 8頁。

がこの小説の構想を得るにあたり、その初期の段階で大きなインパクトを彼に与えたと思われるものに、映画「地獄の黙示録」があるというのが、ぼくの推測（10頁）と述べ、更に、この映画の原作となったJ・コンラッドの『闇の奥』自体と『羊をめぐる冒険』との関連にまで言及したのは加藤（1983⇒2006）だった³⁷。小説が刊行され、まもなく第4回野間文芸新人賞を受賞してから、ほとんど時を経ずして提示されたこの加藤の指摘は鋭い。但し先に見たように、彼が両者の相関性として最後に重視するのは、「プライヴェートネス」からくる作品の「空転」をめぐる問題であって、さほど物語の展開という側面に踏み込んでいるとは言えない。そこで以下、こうした面に焦点を当てて考察していくことにしよう。

さて、加藤（1983⇒2006）は『羊をめぐる冒険』に登場する「コンラッドの小説」が『闇の奥』であることを思わせる伏線として、「河のさかのぼり」のモチーフや「闇のイメージをたたえた「僕」と「鼠」の再会の章」（12頁）等の存在を挙げる。また彼は指摘していないが、第五章の4（124～135頁）で「僕」が「鼠」の元の恋人と対面を果たすのも、作品での位置は異なるものの、『闇の奥』のラストで語り手マーロウが死んだクルツの婚約者と対話する場面と正確に対応しており、村上が『羊をめぐる冒険』の背後に『闇の奥』の存在を暗示しているのは確実である。したがって、山根（2007）が『羊をめぐる冒険』の方法として注目する、「戦争に対するこだわりと、マイノリティーや弱いものの視点から〈歴史〉を紡ぎ直すことの必要性や重要性を示すこと」³⁸は、その契機を、ベトナム戦争を素材にした『地獄の黙示録』から、更に植民地主義批判を内在させた『闇の奥』にまで溯ることが可能となる³⁹。とはいえ、『闇の

³⁷ 加藤典洋「自閉と鎖国 村上春樹『羊をめぐる冒険』」（『文藝』1983年2月号）。後に加藤『村上春樹論集①』（若草書房、2006年）に収録。引用は後者に拠った。また前掲注4 加藤編（1996）も参照。

³⁸ 注10 山根由美恵（2007）107頁。初出は『Problématique』5（2004年7月）。

³⁹ 但し、『闇の奥』のコンラッドには、逆にチヌア・アチェベからの「人種差別主義者」という批判もある。藤永茂『『闇の奥』の奥—コンラッド・植民地主義・

奥』について言うなら、マーロウがコンゴ河を遡航していくのは、クルツを救出するためであって殺しに行くのではないため、当作品自体に〈王殺し＝父殺し〉のモティーフが強く存するわけではない。また、大塚英志が再三引合いに出す『スター・ウォーズ』との関わりについては、元来J・ミリアスとともに『地獄の黙示録』を構想し、後に、その監督権をコッポラに譲渡したルーカスが、そこからアイディアを借りて換骨奪胎した作品が『スター・ウォーズ』に他ならなかつたことからすれば⁴⁰、『羊をめぐる冒険』に『スター・ウォーズ』と通じる部分が出てくるのも当然である。また、小説第六章の7で、出発の決意を固めた「僕」の食事場面に、「それからメイナード・ファーガソンの『スター・ウォーズ』を聴きながらコーヒーを飲んだ」(187頁)と、恰も「冒険」の開始を告げるファンファーレのように、作中時間(1978年)で日本公開がなされたばかりのこの映画のテーマ曲が鳴り響いていることから、『闇の奥』の場合と同様、作品の背後にこの〈父殺し〉を志向する物語の存在が仄めかされているのも確かであろう⁴¹。但し、『羊をめぐる冒険』が発表された時点では、まだ旧三部作の第二「帝国の逆襲(The Empire Strikes Back)」(1980年)までしか公開されておらず、ルーク・スカイウォーカーも、父であるダース・ベイダーとの戦いに決着をつけるには至っていないため⁴²、本稿では、〈王殺し＝父殺し〉との関わりという

アフリカの重荷』(三交社、2006年)参照。

⁴⁰ 立花隆『解説「地獄の黙示録』』(文藝春秋、2002年⇒文春文庫、2004年)「反乱軍はベトコンである。そしてダース・ベーダーがカーツなのである」(164頁)。

⁴¹ 注5前掲の「方法論としてのアナキズム」で、「彼ら(ハリウッドの新しい映画世代：引用者注)にとっては(あるいは僕にとっても)スタンリー・キューブリックの『2001年・宇宙の旅』よりはルーカスの『スター・ウォーズ』の方がよりシリアルな映画』(166頁)と述べる村上は、『羊をめぐる冒険』を受けて(四部作)を締め括る『ダンス・ダンス・ダンス』(1988年)では新しい「ドルフィン・ホテル」を『スター・ウォーズ』の世界に喻えて揶揄するものの『全作品』版57~58頁)、近作『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋、2013年)には、主人公つくるが恋人の沙羅に「フォースと共に歩みなさい」(238頁)と映画中の台詞で励まされる場面があり、あらためての思い入れが覗える。

⁴² ルークがベイダーの死を見届けるのは1983年公開「ジェダイの復讐」(日本公開時の邦題。後に「ジェダイの帰還(Return of the Jedi)」においてであ

点から、相対的に『地獄の黙示録』の方を重視したいと思う⁴³。

1979年（日本では翌年）になってようやく公開に漕ぎつけた『地獄の黙示録』が、諸般の事情で当初ミリアスの書いた脚本とは大きく異なる代物になつていった経緯については、すでに数多くの論及がなされているが、最も重要な改変の一つは、D・ジェイコブの助言によって、フレイザーの『金枝篇』およびJ・L・ウェ斯顿の『祭祀からロマンスへ（From Ritual to Romance）』、そしてT・S・エリオットの詩（『荒地（The Waste Land）』や「虚ろな人々（The Hollow Men）」等）の影響が加わった点だろう⁴⁴。ウィラード大尉（マーロウに相当）が、自ら手を下してカーツ大佐（クルツに相当）を惨殺するという結末は、元来コンラッドにもミリアスにも存在せず、とりわけ『金枝篇』の〈王殺し〉との照応が著しい。「ベトコン」と戦うアメリカ軍の指揮系統を逸脱して密林の〈王〉となったカーツの命を奪うためにウィラードが忍んで行く場面で、鳴り渡るドアーズの「THE END」が、「聴衆に父殺しへの参加を挑発する」（96頁）と述べる立花（2002⇒2004）の指摘は当を得たものと言えるが⁴⁵、ドアーズとジム・モリソンとを偏愛する村上も⁴⁶、当然それに反応したと考えるべきである。就中、映画のオープニング場面に重ねられた歌詞「This is the end, beautiful friend … I'll never look into your eyes again」に見える友への最後の呼びかけなどは、そのまま「僕」と「鼠」の永訣シーンのイメージへと結びついていくもので

る。

⁴³ 村上のこの映画への高評価は、本作について詳細に語る注5前掲「方法論としてのアナーキズム」の他、川本三郎との共著『映画をめぐる冒険』（講談社、1985年）にも、「僕自身はこの作品を高く買っている」（181～182頁）とある。

⁴⁴ 町山智浩『〈映画の見方〉がわかる本』（洋泉社、2002年）159頁。また前掲注40立花（2002⇒2004）の74～77頁、86～94頁、104～108頁等も参照。

⁴⁵ 但し、歌詞の中で直接に父殺し願望等に触れた箇所は、映画では流れない。

⁴⁶ 村上龍・村上春樹『ウォーク・ドント・ラン』（講談社、1981年）92頁、村上春樹「《同時代としてのアメリカ6》用意された犠牲者の伝説—ジム・モリソン／ザ・ドアーズ」（『海』1982年7月）、同「ジム・モリソンのための「ソウル・キッチン」」（『エッジ』1983年10月、後に『村上朝日堂 はいほー！』（文化出版局、1989年⇒新潮文庫、1992年）や『雑文集』（新潮社、2010年）に収録）等参照。

はないか。但し、本稿がより注目すべきだと考えるのは、立花の次の解釈である。

彼（引用者注：ウィラード）は無言で武器を投げ出し、即位したばかりの王位から退く（自己神格化の自己放棄）。民衆がすべてそれにならって、武器を投げ出す。【中略】コッポラは、「荒地」を下敷きとしながら、これもまた根本的なところで換骨奪胎してしまったわけだ。（立花隆『解説「地獄の黙示録』』116頁）

『荒地』自体は、確かにウェストンとフレイザーを二大「典拠」とするものの、『金枝篇』における〈王殺し〉のモティーフの『荒地』への影響はなく⁴⁷、寧ろ、コッポラは『地獄の黙示録』において、これを『金枝篇』から直接換骨奪胎して取り込んだと考えるべきだろう⁴⁸。我々は先に佐藤（2011）の、『1 Q 8 4』や『羊をめぐる冒険』では『金枝篇』と異なり、〈王殺し〉が王権継承を阻止するために行われている、との指摘を確認したが、如上の考察から、まさに『地獄の黙示録』こそが、村上に、このような〈王〉の存立 자체を否定するための〈王殺し〉、という主題への示唆を与え、小説に〈「通過儀礼」の回避〉を行わせた契機だったと推定できるのである。

最後に、これと関連して「三島由紀夫」という問題に眼を向けておこう。『羊をめぐる冒険』における三島批判を扱った論考としては

⁴⁷ 「… *The Golden Bough; I have used especially the two volumes Adonis, Attis, Osiris*. Anyone who is acquainted with these works will immediately recognize in the poem certain references to vegetation ceremonies.」 Notes on *The Waste Land* (T. S. Eliot: THE WASTE LAND & GERONTION, TAISHUKAN, Tokyo, Japan, 1967) , P. 22.

⁴⁸ 立花（2002⇒2004）はコッポラの次のような発言を紹介する。「エンディングにおいて、カーツを殺したウィラードは、第二のカーツとして、原住民から受け入れられる。こここのところで、私は、私自身の未来のヴィジョンを示そうと思った。我々の時代はすさまじい戦争をやりつづけてきた。しかし、将来においては、我々は戦争がない世界を築くことができるだろう。そういうヴィジョンを示すため、私はウィラードに武器を投げ捨てさせ、それを見た原住民たちもそれにならって自分の武器を投げ捨てるという場面を作った」（62～63頁）。

館野（2004）⁴⁹や清（2011）⁵⁰があるが、特に後者は注目に値する。

『羊をめぐる冒険』における鼠の自死には三島の自刃をパロディ化することによって、ニーチェ＝三島的な「力への意志」の美学に対抗するという村上の明確な意志が推測される。村上文学の基底には、つねに「強者」の論理と美に対して、「弱者」たることの論理を擁護し肯定し、そこから発する哀しみと含羞の美を求めるという姿勢が一貫している。（清眞人『村上春樹の哲学ワールド』218頁）

『羊をめぐる冒険』第一章の題目が「1970/11/25」＝「三島事件」の日付とされるのに、テレビで「天皇陛下万歳」を叫んでいたはずの三島が「どうでもいいこと」（21頁）と切り捨てられるアイロニーは、こう考えれば言わば〈アンチ三島由紀夫〉としての〈力への忌避〉を意味するものであり⁵¹、それこそが〈「通過儀礼」の回避〉の正体だったのだと考えられよう。かつて蓮實（1989）⁵²は、作家が「父親殺しの主題をたくみに回避する」（239頁）という点に、大江健三郎『同時代ゲーム』や中上健次『枯木灘』の価値を見出す一方で、『羊をめぐる冒険』に辛い評価を下したが、彼のこの見解は再度問い合わせねばなるまい。また、〈王殺し＝父殺し〉の〈代行〉という本作品に見られる物語構造も、後の『ねじまき鳥クロニクル』、『海辺のカフカ』や『1Q84』等に継承されていく村上文学の看過しがたい特色だが、「通過儀礼」の意義は作品ごとでそれぞれ異なる。

⁴⁹ 館野日出男『ロマン派から現代へ』（鳥影社、2004年）71～89頁。

⁵⁰ 清眞人『村上春樹の哲学ワールド』（はるか書房、2011年）。

⁵¹ 「日本のいまの状況で僕がいまいちばんひつかかっているのは、パワーに対する志向なんですよ。【中略】結局ね、状況が多様化すればするほど包括されたいって意識はあると思うわけです。それがある種の父性的なパワー志向に傾いていくようなね」（前掲注46 村上龍・村上春樹『ウォーク・ドント・ラン』131頁）という村上の発言は、30年以上も前のものだが、ここには彼の昔からの、（特に晩年の三島とは対極の）「父性的なパワー志向」に対する嫌悪が、強く覗える。

⁵² 蓮實重彦『小説から遠く離れて』（日本文芸社、1989年）。

っていると考えられ、その意味でも、この話型を初めて導入した『羊をめぐる冒険』の重要性があらためて問われねばならないのである。

付記

本稿は、2013年5月5日、淡江大學にて開催された、「2013年度第2屆村上春樹國際學術研討會」（大会テーマ「村上春樹文學中的通過儀禮」）での口頭発表に、大幅な加筆修正を行ったものである。

参考文献

- 伊川龍郎（2000）『休日の村上春樹』ボーダーインク
生井英考（1983, 12）「村上春樹と黄金の羊」『ユリイカ』青土社
今井清人（1990）『村上春樹—OFFの感覚—』国研出版
内田樹（2007）『村上春樹にご用心』ARTES
——（2010）『もういちど村上春樹にご用心』ARTES
内田康（2012, 12）「村上春樹『1Q84』論—神話と歴史を紡ぐ者たち—」『淡江日本論叢』26
大塚英志（2009）『物語論で読む村上春樹と宮崎駿』角川書店
加藤典洋（2006）『村上春樹論集①』若草書房
——編（1996）『村上春樹 イエローページ』荒地出版社
——編著（2004）『村上春樹 イエローページ PART 2』荒地出版社
清眞人（2011）『村上春樹の哲学ワールド』はるか書房
佐藤秀明（2011）「村上春樹の「王殺し」」日本近代文学学会関西支部
編『村上春樹と小説の現在』和泉書院
柴田勝二（2009）『中上健次と村上春樹』東京外国语大学出版会
関井光男（1985, 3）「〈羊〉はどこへ消えたか」『國文學』學燈社
高橋丁未子編（1984）『HAPPY JACK 鼠の心』北宋社
立花隆（2002⇒2004）『解説「地獄の默示録」』文藝春秋⇒文春文庫
館野日出男（2004）『ロマン派から現代へ』鳥影社
坪井秀人（1998, 2）「プログラムされた物語」『國文學』學燈社
蓮實重彦（1989）『小説から遠く離れて』日本文芸社

- 久居つばき・くわ正人（1991⇒2003）『村上春樹の読み方—キーワードの由来とその意味』新潮社⇒雷韻出版
- ファン・ヘネップ, A. (1977⇒2012)『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、弘文堂⇒岩波文庫
- 藤永茂（2006）『『闇の奥』の奥』三交社
- フロイト, S. (2011)『ドストエフスキイと父親殺し／不気味なもの』中山元訳、光文社古典新訳文庫
- 町山智浩（2002）『〈映画の見方〉がわかる本』洋泉社
- 村上春樹（1981, 11）「方法論としてのアナキズム—フランス・コッポラと『地獄の默示録』」『海』中央公論社
——（1982, 5）「都市小説の成立と展開—チャンドラーとチャンドラー以降」『海』中央公論社
——（1982, 7）「用意された犠牲者の伝説—ジム・モリソン／ザ・ドアーズ」『海』中央公論社
——（2010, 8）「ロングインタビュー」「考える人」33、新潮社
- 村上春樹・川本三郎（1982, 7）「R・チャンドラーあるいは都市小説について」『ユリイカ』青土社
——（1985）『映画をめぐる冒険』講談社
- 村上春樹・中上健次（1985, 3）「仕事の現場から」『國文學』學燈社
- 村上龍・村上春樹（1981）『ウォーク・ドント・ラン』講談社
- キャンベル, J. (1984)『千の顔をもつ英雄（上・下）』平田武靖／浅輪幸夫監訳、人文書院
- 山根由美恵（2007）『村上春樹〈物語〉の認識システム』若草書房
- 吉田春生（1997）『村上春樹、転換する』彩流社
- 四方田犬彦（1983, 1）「聖杯伝説のデカダンス」『新潮』新潮社
- ランク, O. (1986)『英雄誕生の神話』野田倬訳、人文書院
- Eliot, T. S. (1967) : *THE WASTE LAND*. Taishukan. Tokyo, Japan.

References

Hasumi, S.(1989) *Shosetsu kara Toku Hanarete*. Nihonbungeisha, Japan.

- Hisai, T. and Kuwa, M.(2003) *Murakami Haruki no Yomikata*. Raiinshuppan, Japan.
- Ikui, E.(1983) Murakami Haruki to Ougon no Hitsuji. *Eureka*12,183-187.
- Imai, K.(1990) *Murakami Haruki:Off no Kankaku*.Kokkenshuppan,Japan.
- Kato, N.(2006) *Murakami Haruki Ronshu, I.* Wakakusa Shobo, Japan.
- Kato, N.(Ed.) (1996) *Murakami Haruki Yellow Page*. Arechi Shuppansha, Japan.
- Kiyoshi, M.(2011) *Murakami Haruki no Tetsugaku World*. Haruka Shobo, Japan.
- Machiyama, T.(2002) 'Eiga no Mikata' ga Wakaru Hon. Yosensha, Japan.
- Otsuka, E.(2009) *Monogatari-ron de Yomu Murakami Haruki to Miyazaki Hayao*. Kadokawa Shoten, Japan.
- Sato, H.(2011) Murakami Haruki no 'Ou goroshi'.In Nihonkindaibungaku Kai Kansai Shibu (Ed.). *Murakami Haruki to Shosetsu no Genzai*. 109-117. Izumi Shoin, Japan.
- Sekii, M.(1985) 'Hitsuji' wa Doko e Kietaka. *Kokubungaku* 30, No.3, 120 -125. Gakutoshia, Japan.
- Shibata, S.(2009) *Nakagami Kenji to Murakami Haruki*.Tokyo University of Foreign Studies Press, Japan.
- Tachibana, T.(2002) *Kaidoku "Jigoku no Mokushiroku"*. Bungeishunju, Japan.
- Takahashi, T.(Ed.) (1984) *HAPPY JACK*. Hokusosha, Japan.
- Uchida, T.(2007) *Murakami Haruki ni Goyojin*. Artes Publishing, Japan.
- Uchida, Y.(2012) The weavers of myths and histories: On Haruki Murakami's *1Q84*. *Tamkang Japanese Journal* 26, 3-28. Taiwan.
- Yamane, Y.(2007) *Murakami Haruki: 'Monogatari' no Ninshiki shisutemu*. Wakakusa Shobo, Japan.
- Yoshida, H.(1997) *Murakami Haruki, Tenkansuru*. Sairyusha, Japan.

※2013年8月31日受理 2013年10月26日審査通過

編集委員會

召集人 曾秋桂

副召集人 許均瑞 羅曉勤

編集委員 林雪星 落合由治 邱若山 王世和 孫寅華
楊錦昌 林青樺 賴錦雀 吉田妙子 范淑文
內田康 斎藤正志

執行編輯 落合由治

助理編集 施信余 劉于涵

今号は、投稿論文の外部審査の結果、全投稿 22 本中、16 本が掲載された。今号の掲載率は 72.7% で、すべて学術論文である。

台灣日本語文學報 34

出版者：台灣日本語文學會

理事長 曾秋桂

會 址：25137 新北市淡水區鎮英專路 151 號

淡江大學日本語文學系

傳 真：(+886) 02-2620-9915

網 站：<http://taiwannichigo.greater.jp/>

法律顧問：劉于萱律師

出版日：2013 年 12 月 31 日

ISSN 1727-2262

發行所：致良出版社有限公司

JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 34

CONTENTS

Foreword

Tseng, Chiu-kuei	The 34 th publication foreword.....	1
------------------	--	---

Research Articles

Tseng, Chiu-kuei	An argument on "all the children of God dance" by Haruki Murakami seen as a rite of passage: As an equipment of the tale facing a trauma.....	3
Uchida Yasushi	The evaded rite of passage:A study on Haruki Murakami's A Wild Sheep Chase.	27
Yoshida Taeko	The Sign from the Peculiar World in "The [φ/Second] Bakery Attack": A failed Initiation and Messages from the Nineteen Seventies.....	53
Toda Kazuyasu	The defamiliarization of "YU-BE NO KUMO":The style that Sho-no Junzo has established.....	77
Wang, Yu-hsin	Cultural interpretation perspective on Nagai Kahu's American Stories: Cross culture experiences from an urban observer.....	103
Lai, Yun-chuang	Tokatonton of Dazaiosamu:"Worries" of irony.....	127
Huang, Chih-huei	Tragic Heroes Represented in the Novels of Tsuga-Teishou and Kyokutei-Bakin: Focused on Stories of Reincarnation and Escape to the New World	153
Lai, Jiin-chiueh	A Study of Collocations in Japanese by '春' '夏' '秋' '冬': A view from Contrastive Linguistics Research of Chinese and Japanese	177
Lin, Chin-hwa	A Study of the Semantic Analysis of "(shi)soda": On the Negative Sentences	203
Ochiai Yuji	On the quotation expression in characteristic on genre:The expression structure and its function in newspaper editorials.....	227
Huang, Yu-han	A Pragmatic Analysis of Japanese Non-assertive Expression "souda"	253
Wu, Chin-fang	The research of 「kedo」 in spoken language: Put emphasis on 「Form」 , 「Pragmatics」 , 「Politeness」	279
Fukao Madoka	A Study on Modality Expression Kedo: Based on a Japanese Corpus.....	305
Tung, Chuang-ching	A Discussion on Postmodern Abilities and Reflexivity from the Change of Japanese Perspectives: A Case Study of Labors and Education.....	331
Nakazawa Kazuaki	Social Network Sites to Practice Writing and Reading in Japanese: A Case of Facebook.....	355
Huang, Shih-ying	A contrast study of Taiwanese vs. Japanese in hiding their disagreement: The objects are university female students.....	381
Activities Report		
	Abstract of report in regular meetings.....	407

December 2013

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN